

原 著

説教における弁証法的メタファー — 不一致と類似性 —

古川 敬康

＜要 旨＞

本論文は、メタファーの本質に関する理論として、最も古典と言われるアリストテレスに代表される弁論術的修辞学の立場、次に、「評価しても評価しすぎることはない」と言われる「先駆的役割」をメタファーの分野で果たした I. A. リチャーズによる哲学的修辞学の立場、続いて、これまでの方法とは異なり「経験的ゲシュタルト」という考え方に基盤を置く G. レイコフと M. ジョンソンの提唱にかかる認知意味論の立場、さらに同じ意味論でも P. リクルの哲学的解釈学による意味論の立場、これらメタファーに関する 4 つの代表的立場を吟味した上で、説教における弁証法的メタファーの意義を究明する一試論である。

キーワード：メタファー、哲学的修辞学、認知意味論、解釈学的意味論、弁証法的隠喩

1. 問題の所在

K. バルトは、説教について、それは「神自身が語り掛ける神の言である」¹と説く。説教の矛盾は、われわれの語る説教が「神の言葉たり得る」ことが不可能であることに起因し、ルドルフ・ボーレンが「説教する」ことは「作業可能」かつ「作業不能」であると表現していることである²。しかし説教におけるこの矛盾は、近代神学を代表するシュライエルマッハーのように「有限なるものと無限なるものとの融合一致」³という「人本主義的信仰」では生じないことであって、それは、「神中心的信仰」とヘーゲル以後の弁証法的立場に立つ弁証法的神学の特徴となっている⁴。では、説教の内容における弁証法的関係とはどのようなものであるか。説教の言葉の内容は、神の啓示による人間の罪と神の恵みであるが、それ自体を説教ととれる新約聖書の表現⁵と啓示との関係とを見ると、ここでも、熊野義孝が指摘するように、「ひとつの歴史的文書」にすぎない「聖書はただちに啓示ではない」⁶、啓示それ自体ではない聖書は、啓示をどのように書き留めているのか。マルコには、神の国という無限な事柄につき、イエスが「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか」（マルコ 4：30）と語り、字義通

りには無理で比喩でしか語れないが、どの比喩が適切かと苦勞する場面がある。つまり、説教におけるメタファーという比喩的表現には、われわれ人間の言語の字義通りの意味では表現できない場合に、新たな意味を創造し、無限な神の啓示の事柄を表現する機能があると考え得るのである。

しかし、メタファーとは何かは、決して自明ではない。J. M. ソスキースによると、125 もの定義を発見したものがいるという⁷。では、どのようなメタファー論が説教の内容となるメタファーの弁証法的な関係を明らかにするのに適切であろうか。本論文は、メタファーの本質に関する理論として、最も古典と言われるアリストテレスに代表される弁論術的修辞学の立場、次に、「評価しても評価しすぎることはない」と言われる「先駆的役割」⁸をメタファーの分野で果たした I. A. リチャーズによる哲学的修辞学の立場、続いて、これまでの方法とは異なり「経験的ゲシュタルト」という考え方に基盤を置く G. レイコフと M. ジョンソンの提唱にかかる認知意味論の立場、さらに同じ意味論でも P. リクルの哲学的解釈学による意味論の立場、これらメタファーに関する 4 つの代表的立場を吟味した上で、最も問題となっている「類似性」という概念も含め、説教においては弁証法的なメタファーにとって適切な

メタファー論は何かを検討する一試論である。

2. メタファーの本質

(1) アリストテレスに代表される修辞学的立場の検討

先に述べたアリストテレスによるメタファーの定義によると、メタファーとは「名詞のレベル」⁹に関するもので、その名詞が通常用いられる場所から「偏差」¹⁰つまり「逸脱」しており、対立する別の場所に借用的に転用されるものである。すなわち、「別の名を転用すること」(ὀνόματος ἀλλοτρίου ἐπιφορά)¹¹であり、「名」とは「名詞」を意味し、「転用」とは「場所に関する取り替え」(le changement selon le lieu)を意味している。この逸脱につき、メタファーが機能するように作る時の鍵は「類似を見抜くこと」(ὁμοιον θεωρεῖν)¹²である。このアリストテレスのいう類似性につき、滝浦は、このアリストテレスの理論では、メタファーを理解するとは、「A 対 B = C 対 D という関係の把握」であり、「それは結局、そこにどんな『……のような』があるかを発見す作業なのである」と分析し、「そうだとすれば、メタファーとは潜在的直喩にすぎない、ということになる」と分析結果を述べている¹³。滝浦の分析は、アリストテレス自身が「直喩とはメタファーであり……直喩は、説明の言葉を必要としているメタファーである」と述べている点で、正鵠を得ている。

しかしアリストテレスのメタファー論に対しては、批判が多い。第1に、滝浦の言うように、「類似なものを見抜くこと」が、「或る対象と他の対象との類似性という意味で言われるならば、それはもはやメタファーの問題ではなく、知覚の問題になってしまう」という批判である。第2に、M.C. ピアズリーが撞着法と呼ぶ、例えば、「声なき叫び」とか「生ける屍」のように「二つの反対語を結びつける手法」による表現の極限例のメタファーを「うまく説明できない」という批判である。リクールが正しく指摘しているように、「名の代置」と捉える限り、撞着法による極限例では「類似を、メタファーの論理的地位の中に含めること」が不可能となる¹⁴。第3に、谷口一美によると、例えば、「社長は頭から湯気を出している」のように、名詞レベルでの「A is B」の形式をとらないメタファーがあるという指摘である¹⁵。最も重要な批判は、「隠喩は直喩の単に短縮された形ではなく、逆に、その力動

的な原理だ」¹⁶という点である。この点、谷口は「もみじのような手」とは言えても「もみじの手」とは言えないという例をあげ、必ずしも「相互に書き換えられない」ことを主張し、さらに、効果面でも、「僕の太陽のようだ」の例に見られるように、直喩から受ける「インパクトは小さい」とし、「お姫様だ」というメタファーでは「お高くとまった、自分本位」な否定的な「意味合いが強く感じられる」と述べ、「省略説の前提そのものが、実際には成立しない」¹⁷と述べている。特に、マックス・ブラックは、もしメタファーが字義通りの表現に「代置」されパラフレーズによって言い換えられて翻訳可能であるならば、メタファー自体には何ら情報は含まれず、「何も」教えることもなく、その意義は「認知機能以外」に求めねばならなくなると批判している¹⁸。

(2) I. A. リチャーズによる哲学的修辞学の立場の検討

リチャーズによるメタファーの分野での貢献は、その研究方法にある。すなわち、まず、“Rhetoric”とリチャーズが大文字で書く修辞学とは、「誤解とその救済策の学問」(a study of misunderstanding and its remedies)であるべきであると¹⁹、アリストテレスに始まり A. ワトレイ (Archbishop Whately) に至る研究に照らし、研究対象の最小単位を「単語」(a word)としていたことを誤りとし、この誤りから誤解が起きると批判した。その上で、その誤解からの回復方法として、研究の最初単位を「言述」(discourse)とし、言述内で「言語がどのように働くのか」という言述の内部構造を解明する方法を提唱したのである²⁰。

すなわち、リチャーズによると、「単語の意味の安定性は、その意味を与える文脈の継続性によってもたらさせている」²¹結果にすぎず、文脈が変わればその意味も変わる普遍性が「定理」(theorem)として存在する。この「意味の文脈的定理」²²とは、文脈上、その単語 (word) の前後にある他の単語 (other words) が、「その単語 (it) がどのように解釈されるかを決定する」というものである²³。リチャーズは、「文とその文の中にある単語間の相互作用の分析」²⁴をし、単語の意味が文脈にある他の単語の意味との関係において見出される「言述における単語の相互依存性」を主張し、その単語の意味もその文脈の変化に応じて変化していくと述べている²⁵。すなわち、文脈的定理における「単語」つまり「記号」の意味は、文脈の短縮による、文脈の欠落している諸部分であり、記号は、「欠落して

いる原因と諸条件を表象する」ものののである²⁶。そうである以上、メタファーとは言語の用法において特別な例外的なものでもなく、すべての単語の意味の生成過程に見られる「言語の普遍的原理」なのである。つまり、1つのメタファーには1つの単語ないし句によって支えられている2つの異なる思想があり、そのメタファーの意味は「この2つの思想の相互作用の一つの結果」²⁷である。そこで、アリストテレスのメタファー論とは決定的な決別となる。というのは、もはや問題は、単なる単語の転移とか借用ということではなく、ある記号としての単語が象徴している「欠落している文脈」と他の記号である単語が象徴している別の「欠落している文脈」との相互関係、すなわち、「文脈間の取引き」となるからである²⁸。つまり、単に「人間は狼だ」という例に制限されず、「目が眩むがけっぶち」という例のように、「がけっぶちが目の眩みに結びつく連合体」である場合もあることになる²⁹。

リチャーズは、意味の文脈的定理に基づいて容易にメタファーを科学的に取組む技術として、2つの思想を区別するための「2つの術語」を導入する。すなわち、「主意」(tenor)と「伝達具」(vehicle)である。主意とは、言述で提示されている事柄(what)であり、伝達具とは、言述におけるその事柄の提示の有様(how)である³⁰。しかし、重要なことは、リチャーズが強調するように、「伝達具と主意は、共同作業において、いずれかに帰せられるものよりもより多様な諸力の何たるかの意味をもたらし」³¹ことである。リクールは、この点につき、主意の思想は伝達具の思想のもとで把握されるが、「隠喩とは、この2つの半分があわさって構成された1つの全体なのである」³²と述べ、「隠喩をうみだすものは、〈主意〉と〈伝達具〉の同時的現前であり、両者の相互作用である」³³と一層明確にしている。

いずれにせよ、主意と伝達具とにおける両者の相互作用において、「もとの意味」についてはどのように理解するのであろうか。リチャーズは、複数の単語の複数の意味の交換(exchange)という諸過程に触れ、それは、『それ自身が』それ以前のメタファーの産物である「知覚されている世界」(perceived world)に、この交換が押し付けられる(impose)過程である、と述べている³⁴。その上で、メタファーという用語の意味(the sense of the term metaphor)とは、1つの単語が「1つでもって2つの思想(ideas)をわれわれに与える」あらゆる場合であるが、「もしわれわれが伝達具から主意を区別できない場合には、その時に

は、暫定的に(provisionally)字義的にその単語を受け取ってもよいのであるが、もしわれわれが少なくとも2つの共同的な使い道(co-operating uses)を識別できる場合は、その時は、われわれはメタファーを手に行っているのである」と説明している³⁵。ここでいう共同的使用が存在すると判断する基準は、メタファーの基盤(the ground)、つまり、転換の基盤である「双方に共通な諸特徴」(the common characteristics)が認められることであるとしている³⁶。リチャーズは、主意と伝達具との関係は、「主意と伝達具との対照法」(the tenor-vehicle antithesis)³⁷という「衝突」(conflict)³⁸に見られる「緊張」(the tension)であり、主意の独特な変化(the peculiar modification)は「両者のありそうなこと(likeliness)」よりも、「両者のありそうもないこと(unlikeliness)」によることが一層多い(even more)のである、と述べている³⁹。そして、リチャーズが強調する点は、メタファーにおける主意と伝達具との諸関係には、類比(analogy)に見られるような限界はない(no such limits)ということである⁴⁰。このような言述における新しいメタファーの意味の創造の過程を分析すると、その意味の転換(shift)の直示的な基盤として、「双方に共通な諸特徴」(the common characteristics)⁴¹は一般的にメタファーの根拠として言われている「類似性」(similarity)⁴²であって、この転換の基盤に基づき、双方の非類似的な相違により、「主意の独特な変化」(the peculiar modification)がもたらされるのである。つまり、この主意の独特な変化によって、そのメタファーに固有の意味が新たに創造されるということであろう。

修辞学の哲学の最終章で、リチャーズは、聖書を取り上げ、隠喩的な発話によって或ること(something)を語ることを可能にしている方法に関して、われわれが明晰でないと(unless we are clear)、満足のいくように答えられないであろうと述べ⁴³、隠喩的発話のこの方法に関する正しい明晰な理解の必要性を説いている。というのは、「メタファーを知ること」(a command of metaphor)、あるいは、「諸メタファーの解釈を知ること」が「世界をコントロールすること」(the control of the world)に深くかかわるからであるとしている⁴⁴。その理由は、「我々の世界は1つの投影された世界」であって、「知覚されている世界」(perceived world)は『それ自身が』それ以前のメタファーの産物であるからであるとしている⁴⁵。

ソスキースは、リチャーズの相互作用論の意義につ

いて、「ある個人的な病気になりそうな悲しみ」を表現するメタファーを例に、それは「すでに認められている人間的条件を新しく記述したことではなく」、このメタファーを通してのみ、「この特殊な心的状態へと近づくことが可能であることにある」と述べている。すなわち、メタファーは、「新しい洞察」を表現することを可能にし、リチャーズの流儀で言えばそれ以前のメタファーによって既に知覚されている既存の世界に対して、「純粋に創造的で、別の方法では適当に語り得ない何物かを語る」ことを可能にする「方法」として評価されているのである⁴⁶。このようなリチャーズのメタファーに関する理論は、必ずしも正しく理解されていない面があるが、しかし、正しい理解がなされたとしても、批判がないわけではない。それは、リクールが指摘するように、「リチャーズの分析は、メタファーと現実との関係の問題に向けての位置づけ (orientation) を欠いている」⁴⁷という点である。すなわち、確かに、リチャーズはメタファーの理解が世界の支配と関わることに言及しているが、しかし、それも単に触れる程度に留まっているという点である。その意味で、リチャーズの理論には、「隠喩的言語の存在論的關係」(the ontological bearing of metaphorical language) に関して「決定的な問題」(critical problem) が存在するのである⁴⁸。というのは、リクールが述べているように、解釈の過程は、「生きるあり方」(modes of living)⁴⁹のレベルにおいて起きることだからである

(3) ジョージ・レイコフらの認知意味論の立場の検討

これまで取り上げた修辞学の立場に対し、ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン、マーク・ターナーらの提唱するメタファーの理論は、認知言語学を基盤に、人間の思考作業である「思考過程」(thought process) が多くのメタファーを用いてなされていることに着目して展開し⁵⁰、人間の思考過程はおおむね隠喩的であり⁵¹、われわれの日頃用いている概念は隠喩的な体系でできあがっているという主張をし⁵²、「理解の適切な説明をもたらす鍵」としてメタファーを位置付けるメタファー論である⁵³。彼らも、リチャーズと同様に、メタファーの遍在性 (omnipresence) を認め、特別な言語ではないとするが、メタファーが「根源的に私たちの思考・概念の基礎をなしている」事実を「広範なデータからはじめて体系的に示した」⁵⁴点に、本質的な相違点がある。そのデータに基づき、「人間の概念体系がメタファーによって成り」、そして、「人間の概念

体系の中にメタファーが存在しているからこそ、言語表現としてのメタファーが可能なのである」と主張する⁵⁵。レイコフらは、概念メタファーを、「構造のメタファー」(structural metaphor)、「方向のメタファー」(orientational metaphor)、それに「存在のメタファー」(ontological metaphor) の3種類に分類しているが⁵⁶、それらもすべて「経験を通じて得られてきたもの」⁵⁷である。

レイコフらは、メタファーは「経験を通じて得られてきた」⁵⁸という観察的分析による推論から、メタファーの基盤は経験であるというテーゼを立て、基盤である経験が異なることで、「さまざまな異なったメタファーが生じた」と見ている。すなわち、この基盤である経験をメタファーで表現するために、“is” という言葉」を「一連の経験を表わしている速記法」として用いる。つまり、この立場においては、個々の経験を部分々々で断片的にとらえるのではなく、その経験を集合体的に1つのまとまりを成す全体像 (ゲシュタルト) を形成しているものとして捉えることが前提とされているのである⁵⁹。「メタファーからなる概念とは、ある経験に他の経験に基づいて部分的に構造を与えること」⁶⁰という。この立場からは、「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」ということになるが⁶¹、ゲシュタルトは、1つのまとまりとして、「構造」を与えられているので、メタファーがある種の経験を他の種類の経験に基づいて理解を生むという場合にも、それはゲシュタルトを重ね合わせることで「一貫性」を創り出すことによるのであると言えよう⁶²。

このレイコフらのメタファー論の意義として、認知意味論の立場から谷口一美は、『既知の、具体的なものの』を通して、『未知の、抽象的なものの』を理解するという機能⁶³を挙げている。さらにレイコフら自身は、メタファーの創造的意義も認めている。すなわち、レイコフらによると、われわれの世界は概念化された世界であって⁶⁴、その概念化はわれわれが日常的に用いている様々な概念による。実際、日常的表現で、それが「字義通り」の表現と思われているものであっても、多くが比喩であり、この日常的表現であるメタファーの根底には、レイコフらが「概念メタファー」(conceptual metaphor) と呼ぶメタファーが存在しているという⁶⁵。つまり、世界に対する既存の認識の仕方は既存の常套的に用いられている概念メタファーの概念体系と概念構造によってもたらされ維持されているものであるから、そうでない新しい概念メタ

ファーは新しい概念体系と新しい概念構造を提供し「世界に対する認識の仕方」を新たに創造することになるという。つまり、概念メタファーには、「創造的メタファー」として「新しい意味」を創る機能もあるのである⁶⁶。さらにこの延長線上のこととして、自己理解をもたらす意義もある、とレイコフらは述べている⁶⁷。すなわち、経験のゲシュタルトを重ね合わせるメタファーは自分の経験に関しても活用でき、われわれは「自分の人生の営みを成り立たせているメタファー」にいての知見を持ち、さらに「新しく代わりとなったメタファー」によって自分の人生を見つめ直すことの繰り返しの中で、「自分の人生に意味を与える適切な個人的メタファー」を探索するならば、その探索それ自体が自己理解なのであると述べている⁶⁸。重要なことは、自己理解に関する創造的メタファーによって、われわれはその創造的メタファーの体系と構造とによって「自分の人生に新しい一貫性を、これまでの経験に新しい意味を与える一貫性を絶えず創り出す」⁶⁹ことができることである。

ではこのようなメタファーの基盤は何かというと、単語と単語の「類似性」(resemblance)や主意と伝達具の「双方に共通な特徴」(the common characteristics)ではなく、レイコフらはそれを「われわれの経験内部の諸々の体系的な相互関係」⁷⁰に置き、しかも、この経験間の「対応関係は類似性に基づく必要がない」と述べている。しかし、先に「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」と見たが⁷¹、「ある事柄」と「他の事柄」との関係について、メタファーによって規定された「その概念に基づいてわれわれは類似性を知覚するのである」と述べている⁷²。類似性に関しては、「直接の類似性」が見いだせない場合でも⁷³、「どのような類似点があるかについて事実を検討して、後から説明しようとするだけにすぎない」とも述べている⁷⁴。つまり、類似性は、メタファー以前にあるものではなく、メタファーによって創り出され⁷⁵、創り出された類似性により、両領域間の「相互作用に基づく創造的理解」が生まれるとされているのである⁷⁶。

メタファーの構造を説明するのに、リチャーズなどの修辞学ではtenor(主意)とvehicle(伝達具/媒体)を用いたが、レイコフらの認知意味論では、その代わりに、「目標領域」(target domain)と「起点領域」(source domain)を用い⁷⁷、類推モデルでは、「ターゲット」(target)と「ベース」(base)を用いている⁷⁸。目標領域に存在するものに対応する起点領

域に存在するものが、目標領域に存在するものに「写像」(mapping)される⁷⁹。つまり、ある領域における「経験」を「他の全く異なった概念の領域から持ち込んだ構造(structure)を用いて」、「理解する」のである⁸⁰。吉村公宏は説明を添え、「目標領域が難しいほうで、起点領域がやさしいほうで」と述べている⁸¹。メタファーには領域間の写像として、このやさしいほうの起点領域から難しい方の目標領域へ要素が移される(carry-over)⁸²という、「起点領域と目標領域との間におけるイメージ・スキーマ構造の類似性」があるとされている⁸³。この類似性について、レイコフらは、その「何故」に対しては「まったく説明できない」⁸⁴と述べているが、「類推」とは「類似性に基づく推論」であるとし、「未知のあるものを既知のものに喩えたりなぞらえたりすることで理解を得ようとする思考過程」であると説明している⁸⁵。類推モデルの用語の選択につき、谷口は、ターゲットとベースにおける「平行性」から「動機」が導かれ⁸⁶、「対応づけ」が行われていると見ている⁸⁷。レイコフらのメタファー論では、写像はベースないし起点領域からターゲットないし目標領域への一方通行性だけを認める立場が一般的である⁸⁸。つまり、「考えは食物である」というメタファーでは、写像によって、「考えは十分に消化・吸収し、血となり肉となる」⁸⁹と表現することで、考えについて「新しい理解」が創造されるという訳である。

このようなレイコフらのメタファー論の根底には、意味論(semantics)は客観的意味論(objective semantics)とは異なる「認知意味論」(cognitive semantics)⁹⁰であって、メタファーとは諸概念と諸経験との隔たりを埋めるものであり、われわれの経験を明確に把握する概念構造以前の経験に対して、その構造をもたらすものである⁹¹、という意義付けがなされている。確かにこの認知意味論の立場からのメタファー論は、ある単語が起点領域から目標領域へ移行することにより、両領域に存在するものの写像によってその目標領域におけるその単語の新しい意味を発見するものであると言えるであろう。しかし認知意味論のメタファー論に対し、ソスキースは、「言葉の由来と言葉の意味とを混同する誤りに陥る」⁹²と批判している。この点のソスキースの批判は、エヴァ F. キティが「われわれがメタファーと出会ったときに、どのように隠喩的発話を解釈するのかという諸問題」に関して「真にはメタファー解釈の理論ではない」⁹³という指摘をしていることから、的を射たものと言えよう。

(4) ボール・リクールによる哲学的解釈学の立場

リクールは、言語の意味論性⁹⁴をリチャーズから引き継いで隠喩の意味論に入り、そこを超えて、「隠喩的言語の及ぼす存在論的効力」⁹⁵の指示作用 (reference, référence) にまで射程を及ぼしている。

リクールは、自説の隠喩論を展開するに当たり、記号論 (semiotics) と意味論 (semantics) とを峻別する⁹⁶。リクールによると、記号とは、「言語内関係」に留まり、同じ体系内の他の記号に言及する (refer) だけである。それに対し、意味論は、記号とそれが示す諸事柄 (the things denoted) との関係を取り上げ、言語 (language, la langue) と世界 (world, le monde) との関係を取り上げる⁹⁷。これを、意味論における言語の自己超越機能であるとし、これによって、われわれは、社会と結びつき、社会と一つになっていく (integrating man into society) と見ている。これは指示作用という概念と一致する⁹⁸。

さらに、リチャーズの「意味作用の文脈的定理」において主意と伝達具との相互作用によって新しい意味が生まれるという点につき、マックス・ブラックが修正を加え相互作用の機能を明確にしたことを高く評価している。すなわち、ブラックは、文の中の「隠喩的単語」 (the metaphorical word) を孤立させて「焦点」 (focus) と呼び、その文脈を構成する文の残りを「枠」 (frame) と呼び⁹⁹、両者が「共に活動しあう」ことで「新しい意味」 (a new meaning) を惹起させる (to give rise) ことができるとし、メタファーによる新しい意味は「パラフレーズにより言い尽くせず、字義的活用へ還元できない」とした。リクールは、どのようにして新しい意味を生じさせるのかという「リチャーズの直面した問題」¹⁰⁰と、「その創造的行為」を「心理的用語によってしか語らない」¹⁰¹マックス・ブラックによる未解決¹⁰²の意味論的解決に取り組んでいる。その際、「短縮された直喩としての隠喩」論を弁護するドナルド・ダビドソンを批判するモンロー・ピアズリーの『美学』 (Aesthetics)¹⁰³に基づき、哲学的文学批判の手法を取り入れている。すなわち、まず、すべての言説 (statement) においても、「意味」 (sense, sens) を言語外の外部へ向かう「指示作用」 (reference, référence) から区別し、意味を理解するには、指示作用へ向かわなくてはならないとする。つまり、意味と指示作用との間で、第一次の意味 (the first meanings) の作業として一旦は分離が行われ、次に第二次意味 (the secondary meanings) の作業としてこの逆転 (reversing) が行われる¹⁰⁴という2つ

の作業が必要である、とされている。この作業により新しい意味の「発明か発見」 (to invent or discover)¹⁰⁵がある。

リクールは、メタファーの解釈学的意味論を展開するに当たり、ピアズリーの文学批判を自説へ至る予備的意味で援用する。すなわち、メタファーとは、「『主語』 (subject) と『修飾語句』 (modifier) が欠かせない (requiring)、一種の『属性付与』 (a kind of "attribution") である」という命題を立てる。一種の属性付与とは、主語と修飾語句との関係において、「両立不可能性」 (incompatibility)、「自己矛盾的属性付与」 (self-contradictory attribution)、それにその属性付与自体を削除してしまう (cancels itself out) 属性の付与を言うのである¹⁰⁶。つまり、まず、両者間に「葛藤」が起きる。しかし、自己矛盾的な修飾語句にはその主語に対して属性付与しうる共示的意味 (connotations) が潜んでいて、共示的意味が発明ないし発見されるように、メタファーにおける「意味の創作」 (the production of meaning)¹⁰⁷の作業が始まるとされている。つまり、隠喩的意味は「本来の意味」に対する「逸脱」ではなく「全体としての言説の意味」 (meaning of a statement as a whole) なのである。辞書は「本来の意味」によるため、隠喩的意味は記載されていないが、メタファーによる意味は、言述の「生きた言葉 (speech)」にしか存在しないものである。ただ、リクールは、共示的意味が「ひそんでいる」というピアズリーの見解を批判し、「意味論的革新」 (semantic innovation) 説を提唱する¹⁰⁸。すなわち、メタファーは「言語の瞬間的な創造」であって、「既定のものとしての言語の中に位置をもたない」し、「どこからも引き出されない」と明言した上で、「隠喩的属性賦与の本質は、ある文脈を現実の唯一の文脈となす相互作用の網目をつくりだすことである」と主張する。これが、言述における意味論的革新ないし意味論的出来事 (semantic event) である。そこで、言述に関する第1基準 (the first criterion) として、「聞き手または読み手の観点をとって、現われ出る意味作用の新しさを、読み手の瞬間的な作品として扱うべきなのである」と言う¹⁰⁹。しかし、言語共同体内で人々に常用されると、最終段階では死んだメタファーとなるという¹¹⁰。

では、メタファーの二次の意味である隠喩的意味は、どのように解釈されるのであろうか。リクールは、まず、「類似」を解釈の鍵とする¹¹¹。類似性 (similarity) は、メタファー以前にはない類似性であって、「述語の属

性賦与」によって与えられ、その類似性によって、「意味の変動」が起きる。つまり、「類似の役割」は、「意味論的な面にむかっていく」ことにあり、意味論的な面とは単語ではなく言述の問題であって、「撞着法で機能している複雑な表現」とは「切り離せない働きである」と述べ、「緊張、相互作用、論理的矛盾といった概念が、類似の役割」には不可欠であって、それによって、「それまで＜隔たって＞いたものが、突然＜近く＞にあるように見える」ことによりメタファーによる意味の変動が起きるとしている。つまり、これらは「隠喩が＜意味をなす＞ための接近の裏返し」的意義をもつとされる¹¹²。まさに、「意味論的な逆説」¹¹³である。「類似性」を見出すことに関しては、「類似は見られるよりも構成される」¹¹⁴のものであって、「＜類似＞の論理的構造を啓示するのが隠喩である」と述べている。すなわち、言述では字義的レベルで矛盾が保持される「異なるもののの中に同一なるもの」が見いだされる論理的構造によって、「＜同一＞が、＜差異＞にもかかわらず働く」が¹¹⁵、そのためには、「既存の論理的な境界を消し去る」ことが必要となる。つまり、「以前の範疇化をうち破って、前の境界の廃墟の上に新しい境界を敷設する」、これが「隠喩の力」であり、新たな分類を生み出す「思考の力動性」であるとしている。この点で同じ「既知から未知を演繹する」¹¹⁶ことと言っても、それは、今までの思考を形成していた分類方法による範疇のあり方を未知の分類による範疇のあり方へ変える刷新であり、この範疇の再編か刷新による新たな意味の創造なのである。ここで、リクールは、ヴィトゲンシュタインの分析を隠喩に転置することを提案し、両義的なイメージの場合には、「ある重要な変化を導入する」¹¹⁷に至ると述べている。すなわち、図Aとも、図Cとも見られるようなゲシュタルト（形態）Bがある場合に、そのBが与えられていると、通常の場合はAかCかとなる。しかしメタファーの場合には、例えばAが主意で、Cが伝達具であるとする、ACで構成すべきゲシュタルトは、「共通の要素B」である。そして、Bから見ると、AもCも類似しているような視点を構成することになる¹¹⁸。つまり、AもCも類似しているとする新しい範疇を創造し、この新しい分類化によるBの視点で世界を理解するのである。この場合、＜AをCと見る＞ということが、類似を規定する。その＜と見る＞が、「一貫しないか、偶然か」で不自然な、あるいは、陳腐なメタファーとなり、失敗となる。成功するメタファーは、「発見の驚き」をもたらすものである、という¹¹⁹。

リクールは、作品を解釈することは、「作品が指示

する世界を展開させることである」¹²⁰と述べる。生きた隠喩は、字義通りの意味が廃墟と化し、その上に新しい意味論的な関与として、字義通りの解釈による指示を廃する。その反面、隠喩の意味に対応する「隠喩的な指示作用」がなされると述べ、「その指示作用が働いているところを直接示すことができようか。」と、疑問符を投げかけた上で、控えめな肯定に留めている¹²¹。この関連で隠喩的真理に関して、殊に、「認識論における＜神話＞の実例」として「直接的存在論的解釈」を批判して、「隠喩的なものと字義通りのものとの間の緊張などは、はじめからそこには欠けている」と述べている¹²²。真理に関して、リクールは、「弁証法的方法」を提案している。それは、「隠喩的真理の＜緊張関係＞概念」を証明するためであるという。すなわち、真理に関する言語がメタファーであること、しかも、メタファーとは「暗黙の＜でない＞」を内包していることを「知らないために」、「素朴存在論」になる解釈の「不適合」性を指摘する。また逆のケースもあるという¹²³。

このように、リクールの解釈学的意味論の立場からのメタファー論は、アリストテレス、リチャーズ、それに、レイコフらの認知意味論までの諸論点にほぼ触れていると言えよう。その中で、さすがに代置理論はとらないが、相互作用論、類似論を取り入れ、ゲシュタルトの活用も含め統合する立場になっている。そしてこの類似性に関して、隠喩的真理への言及に際し弁証法的方法を提案しているのである。

3. 結論

アリストテレスの修辞学的メタファー論に対しては、リクールが正しく指摘しているように、アリストテレスのいう「名の代置」という意味でメタファーを捉える限り、ピアズリーの撞着法による極限例においては、「類似を、メタファーの論理的地位の中に含めること」が不可能となることから、この立場に立つことは、説教にとって大きな損失となると思われる。特に、この理論では「十字架」と「キリスト」という2つの名詞の間の類似性につき、説明ができなくなるであろう。というのは、聖書を見ても、名詞のレベルでは、「十字架につけられたキリスト」（Ⅰコリント2：2）という句において、「十字架」と「キリスト」という2つの名詞の間に類似性を見ることを、当時の読者に予想することは不可能であったからである。

すなわち、現代のように十字架を首飾りとする文化ではそれに良い意味が込められていると信じられているが、当時は全く逆であって、十字架に肯定的意味は皆無であって、それは否定的意味の極致的存在であったからである。文字通りには、イエスは、「完全な人間的失敗者」(complete human failure)であり、だからこそ、「十字架の上でのそのメシアの死の使信はつまりきであったのである。」¹²⁴ キリストという肯定的なものと十字架という否定的なものとの間には、名詞的レベルにおいて、類似性を認めることは不可能であったのである。このキリスト教の最も中心にあるメタファーを理解する理論として、アリストテレスの修辞学的なメタファー論は適切でないと言えよう。それに対し、リチャーズにはこのような欠点はないが、しかし、リチャーズにとってのメタファーに関する課題は、主意と伝達具との関連性を見出すに至るまでの途中の課程が明確でなく、「関連性の充足」が求められる。さらに、リチャーズはメタファーの理解が世界の支配に関わることに言及しているが、しかし、それも単に触れる程度に留まっているという点である。説教において、メタファーは現実の世界との関わりをもつ。そこで、この点の課題の克服が必要となる。聖書との関連において、この批判は特に重要である。その重要性は福音書におけるイエス・キリストの死を例にとって見ても明らかである。すなわち、それぞれの福音書記者が、どのような状況にある共同体に向けての使信として、どのような文脈の中にイエス・キリストの死を置いているかによって、単にその死の隠喩的意味(sense)のそれぞれの独自性が明らかとなるばかりでなく、その死の指示(reference)がどのような現実に関するものであるかという他の福音書と異なる点も明らかになってくるのである。レイコフらの認知意味論のメタファー論に対しては、言葉の由来と言葉の意味とを混同する誤りに陥っており、真にはメタファー解釈の理論ではないため、どのように隠喩的発話を解釈するのかという問いに関し、われわれの日常的な経験とは全く異なる聖書の世界の啓示にどう対応できるかが問題となる。さらに、リチャーズが主張するメタファーにおける衝突には何ら触れていないが、触れていない理由は、われわれの経験をそのメタファー論の基盤をすることによると思われる。聖書との関わりで最も重要な問題は、聖書の世界の啓示のような、われわれの日常的な経験とは全く異なるものをどう解釈するかである。この点、リクルの解釈学的立場は、属性付与によって与えられた類似性によって、意味の変動

が起きる点を明確にしている。リクルのこの意味の変動の過程について、例えば、Aが主意で、Cが伝達具であるとする、ACで構成すべきゲシュタルトは、「共通の要素B」である。Bから見ると、AもCも類似しているような視点を構成することになる¹²⁵。つまり、AもCも類似しているとする新しい範疇を創造することになる。そして、この新しい分類化による視点が世界を理解するようになるという具合に詳細に述べている。この点は評価し得る。しかし、この過程が弁証法的方法によることをあまり明確に十分に説明していない嫌いがあり、しかも、リクルは文脈の作用に言及しているが、リチャーズの大きな貢献である文脈的不一致(contextual incongruity)の意義を十分に生かしきれていないように思える。それに反し、H.-G. ガダマーはこの弁証法的関係について、次のような趣旨のことを述べている。人がある表現をある事から他の事へ移行して用いる場合には、何らかの意味で両者に共通する事柄を抱いているのであり、ある表現のこのような移行的使用を通して、自己の広がる経験を理解するのである。その移行的使用の場合に、外見か意義か、何らかの類似性を相互間に見出しているのであり、ここにメタファー性があるのである。このような表現の移行的使用によるメタファーの表現を得て、個々の経験の特殊性は一般的知識としての共通性を取得していくのである。この過程は多種多様な現象間に共通項を考えつくことによってその観察した事柄の統一性を洞察する弁証法的思考過程なのである。つまり言語自体の発展は、ある領域(sphere)から他の領域へ移行する言語のメタファー表現において存在する弁証法的過程の産物なのである¹²⁶。メタファーを扱う説教においては、文脈的不一致、範疇的不一致、その上で、弁証法的に類似性を創造することが必要とされていると結論付けることが出来ると考える。

結論として、説教における弁証法的メタファーという観点から見ると、メタファーにおける文脈の意義をリチャーズの理論から学び、リクルからは類似性の捉え方を学べるが、その弁証法的関係については更にガダマーから学べる。レイコフらのメタファー論は、経験を基盤とする認知論としては重要であるが、説教の啓示を内容とする弁証法的側面においては、そもそもそのようなことを念頭に置いていない理論と思われる。

文 献

- 1 Karl Barth, *Homiletics*, trans. Geoffrey W. Bromiley and Donald E. Daniels (Louisville, KY: Westminster/John Knox Press, 1991), 44.
- 2 加藤常昭『説教論』日本基督教団出版、1993年、346頁。
- 3 桑田秀延「弁証法的神学」『桑田秀延全集2』キリスト教新聞社、1975年、35頁。
- 4 同書、32頁。
- 5 C. H. Dodd, *The Apostolic Preaching and Its Developments*, London: Hodder & Stoughton, 1936 は、新約聖書の記述から使徒的説教とは何かを分析している。
- 6 熊野、前掲書、94頁。
- 7 J. M. ソスキース『メタファーと宗教的言語』小松加代子訳、玉川大学出版部、1992年、45頁。
- 8 ポール・リクール『生きた隠喩』久米博訳、特装版岩波現代選書、岩波書店、1998年、169頁
- 9 同書、10頁。
- 10 同書、15頁。久米は「偏差」と訳しているが、「ずれ」のことであって「逸脱」という表現の方が適切であろう。
- 11 Aristotle, *Poetics*, XXI. 7(1457b).
- 12 Aristotle, *Poetics*, XXII. 17(1459a).
- 13 滝浦静雄、「メタファーの構造と論理」『記号 論理メタファー』岩波書店、1986年、186-187頁。
- 14 リクール、前掲書、241-242頁。
- 15 谷口一美『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』英語学モノグラフシリーズ20、研究社、2003年、6頁。もっとも、直接的には、名詞レベルに「相互作用説」を提唱する意味の文脈的定理に対するものであるが、批判としてはアリストテレスの名詞レベルが念頭にあると言えよう。
- 16 リクール、前掲書、248頁。
- 17 谷口、前掲書、6頁。
- 18 リクール、前掲書、187頁は、Max Black, *Models and Metaphors*, Ithaca: Cornell University Press, 1962 の見解を詳説している。
- 19 I. A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric*, London: Oxford University, 1936, 3. なお、本書には『新修辞学言論』石橋幸太郎訳、南雲堂、1961年がある。
- 20 Richards, *Philosophy of Rhetoric*, 8-9.
- 21 Ibid., 11.
- 22 Ibid., 93.
- 23 Ibid., 32.
- 24 Ibid., 39.
- 25 Ibid., 69-70.
- 26 Ibid., 34.
- 27 Ibid., 93.
- 28 リクール、前掲書、176頁。
- 29 ソスキース『メタファーと宗教的言語』96-97頁。ソスキースは、マックス・ブラック(Max Black)がメタファーの構造につき「二つの名辞」説をとり、「二つの明確な主語を持っている」とする立場を批判し(53頁)、リチャーズの主張するメタファーの構造論を支持している(97頁)。
- 30 I. A. Richards, "Power and Limits of Signs," in *Richards on Rhetoric: I. A. Richards: Selected Essays (1929-1974)*, ed. Ann E. Berthoff, New York: Oxford University, 1991, 212.
- 31 Richards, *Philosophy of Rhetoric*, 101.
- 32 Paul Ricoeur, *La métaphore vive*, Paris: Éditions du Seuil, 1975, 105.
- 33 リクール、前掲書、177頁。
- 34 Richards, *Philosophy of Rhetoric*, 108-109.
- 35 Ibid., 119.
- 36 Ibid., 117.
- 37 Ibid., 132.
- 38 Ibid., 127.
- 39 Ibid., 127. リクール、前掲書、179頁も同旨。
- 40 Richards, op. cit., 132.
- 41 Ibid., 117.
- 42 Ibid., 127.
- 43 Ibid., 134.
- 44 Ibid., 135.
- 45 Ibid., 108-109.
- 46 ソスキース、前掲書、98頁。
- 47 Ricoeur, *La métaphore vive*, 83.
- 48 Ibid., 82.
- 49 Ibid., 83.
- 50 George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live by*, Chicago: University of Chicago, 1980, 151, 154. 訳書としては、G. レイコフ、M. ジョンソン『レトリックと人生』渡辺昇一他訳、大修館、1986年がある。
- 51 Lakoff and Johnson, *Metaphor*, 6.
- 52 Ibid., 4.
- 53 谷口、前掲書、7頁。
- 54 同書、11頁。
- 55 レイコフ、ジョンソン、前掲書7頁。

- 56 谷口、前掲書、11 頁。
- 57 同書、15 頁。
- 58 同書、13 頁。
- 59 レイコフ、ジョンソン、前掲書、112 頁。
- 60 同書、123 頁。
- 61 同書、6 頁。
- 62 レイコフ、ジョンソン、前掲書、326 頁。
- 63 谷口、前掲書、16 頁。
- 64 レイコフ、ジョンソン、前掲書、295-310 頁に亘る第 27 章「メタファーと客観主義神話の限界」で、この点を詳説している。
- 65 谷口、前掲書、7 頁。
- 66 レイコフ、ジョンソン、前掲書、202-214 頁。
- 67 同書、322 頁。
- 68 同書、322-323 頁。
- 69 同書、323 頁。
- 70 同書、101 頁。
- 71 同書、6 頁。
- 72 同書、221 頁。
- 73 谷口、前掲書、38 頁。
- 74 レイコフ、ジョンソン、前掲書、171 頁。
- 75 同書、221 頁。
- 76 同書、320 頁。
- 77 George Lakoff and Mark Turner, *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago: University of Chicago Press, 1989, 131.
- 78 谷口、前掲書、2 頁。
- 79 George Lakoff, *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: University of Chicago Press, 1987, 283.
- 80 Lakoff and Turner, *More than Cool Reason*, 57.
- 81 吉村公宏『はじめての認知言語学』研究社、2004 年、107 頁。
- 82 谷口、前掲書、58-59 頁。
- 83 Lakoff and Turner, *ibid.*, 123.
- 84 レイコフ、ジョンソン、前掲書、171 頁。
- 85 谷口、前掲書、171 頁。
- 86 同書、181 頁。
- 87 同書、182 頁。
- 88 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会、2002 年、75 頁。
- 89 吉村、前掲書、114 頁。
- 90 Lakoff, *Women, Fire, and Dangerous Things*, 138, 172.
- 91 Lakoff, *op. cit.*, 303.
- 92 ソスキース、前掲書、152 頁。
- 93 Eva F. Kittay, *Metaphor : Its Cognitive Force and Linguistic Structure*, New York: Oxford University Press, 1987, rep. 1991, 186.
- 94 リクール、前掲書、168 頁。
- 95 同書、181 頁。
- 96 Paul Ricoeur, *The Rule of Metaphor: Multi-disciplinary Studies of the Creation of Meaning in Language*, tr. Robert Czerny, Buffalo: University of Toronto Press, 1977, 66-76.
- 97 Ricoeur, *Metaphor*, 74. Ricoeur, *La métaphore vive*, 97.
- 98 Ricoeur, *La métaphore vive*, 74.
- 99 Ricoeur, *Metaphor*, 85. Black, *Models and Metaphors*, 27-28.
- 100 リクール、前掲書、191 頁。Ricoeur, *Metaphor*, 87.
- 101 同書、195 頁。
- 102 Ricoeur, *Metaphor*, 88.
- 103 Monroe C. Beardsley, *Aesthetics : Problems in the Philosophy of Criticism*, New York: Harcourt, Brace and World, 1958.
- 104 Ricoeur, *Metaphor*, 92.
- 105 *Ibid.*, 93.
- 106 *Ibid.*, 95.
- 107 *Ibid.*, 95.
- 108 Beardsley, *Aesthetics*, 302. リクール、前掲書、211 頁に引用。
- 109 リクール、前掲書、213 頁。
- 110 同書、214 頁。
- 111 同書、241 頁以下に「類似のための弁護」という 1 つの項を当てている (241-253 頁)。
- 112 同書、241-243 頁。
- 113 同書、245 頁。
- 114 同書、244 頁。
- 115 同書、246-247 頁。
- 116 同書、249 頁。
- 117 同書、272 頁。
- 118 同書、274 頁。
- 119 同書、273-274 頁。
- 120 同書、293 頁。
- 121 同書、309-310 頁。
- 122 同書、337 頁。
- 123 同書、328-329 頁。
- 124 Martin Hengel, *The Cross of the Son of God*, trans. John Bowden, London: SCM Press, 1976;

rep. 1981), 228.

¹²⁵ 同書、274 頁。

¹²⁶ Hans-Georg Gadamer, *Truth and Method*, 2nd ed., trans. Joel Weinsheimer and Donald G. Marshall, New York: Crossroad, 1989, 428-430.

Dialectical Metaphor in Preaching : Its Incongruity and Similarity

Takayasu Furukawa

< Abstract >

The paper deals with how to interpret dialectical metaphors in preaching. It focuses on the incongruity between tenor and vehicle and attempts to find a way to clarify the similarity between them and to interpret it. The author examines major theories of metaphor including the theories of Aristotle, I. A. Richards, G. Lakoff and M. Johnson, and P. Ricoeur.

Keywords: metaphor, reflective rhetoric, cognitive semantics, hermeneutic semantics,
dialectical metaphor